

保護者が知っておきたい
就職活動に関するデータ

data 10

就職活動を控えた学生を取り巻く環境は、保護者自身が就職活動をしていた時代とは様変わりしています。そのため、お子さまの就職活動は、保護者世代のものとは、手順、内容、スケジュールなどもかなり異なります。やるべきことは多岐にわたり、膨大な情報から必要な情報を正しく選ぶ難しさは、保護者世代には想像しづらいものです。

そこで、お子さまを見守るために、保護者として知っておきたい10個のデータをまとめました。もちろん数値自体を覚えていただく必要はありません。どんな状況下でお子さまが就職活動しているのか。それを理解したうえで、安心して見守り応援していただく一助となれば幸いです。

contents

- 1 世代による環境の変化
- 2 共働き世帯の推移
- 3 大卒求人倍率の推移
- 4 就職活動のスケジュール
- 5 就職内定率の推移
- 6 インターンシップ参加率
- 7 入社予定先の決め手
- 8 就職活動にかかる費用
- 9 保護者とのかかわりで「よかったこと」
- 10 保護者とのかかわりで「嫌だったこと」

1

世代による環境の変化

■ 就職活動生を取り巻く環境は大きく変化

	大学進学率	日本の 経済成長率	大卒 求人倍率	大学生の 就職先業界
情報誌世代	25.1% (1988年)	4.2% (1974~1990年度の 平均値)	2.41倍 (1992年3月卒)	製造業 26.1% サービス業 25.4% (1993年)
Web 世代	53.3% (2018年) 世代間の学生数は、 1学年約46万人から 約72万人に増加し ている。 出典：文部科学省学校基本 調査	0.74% (2004~2015年度 の平均値) 実質GDPの対前年 度増減率。 出典：内閣府GDP統計 より加工	1.53倍 (2021年3月卒) 大卒求人倍率は、 学生1人当たり に何件の求人がある かの目安。 出典：リクルートワークス 研究所	製造業 12.1% サービス業 33.9% (2019年) 上記の割合の変化により、 サービス業に進む学生は約4 万人増加した。 出典：文部科学省 学校基本調査より加工 ※下記注参照

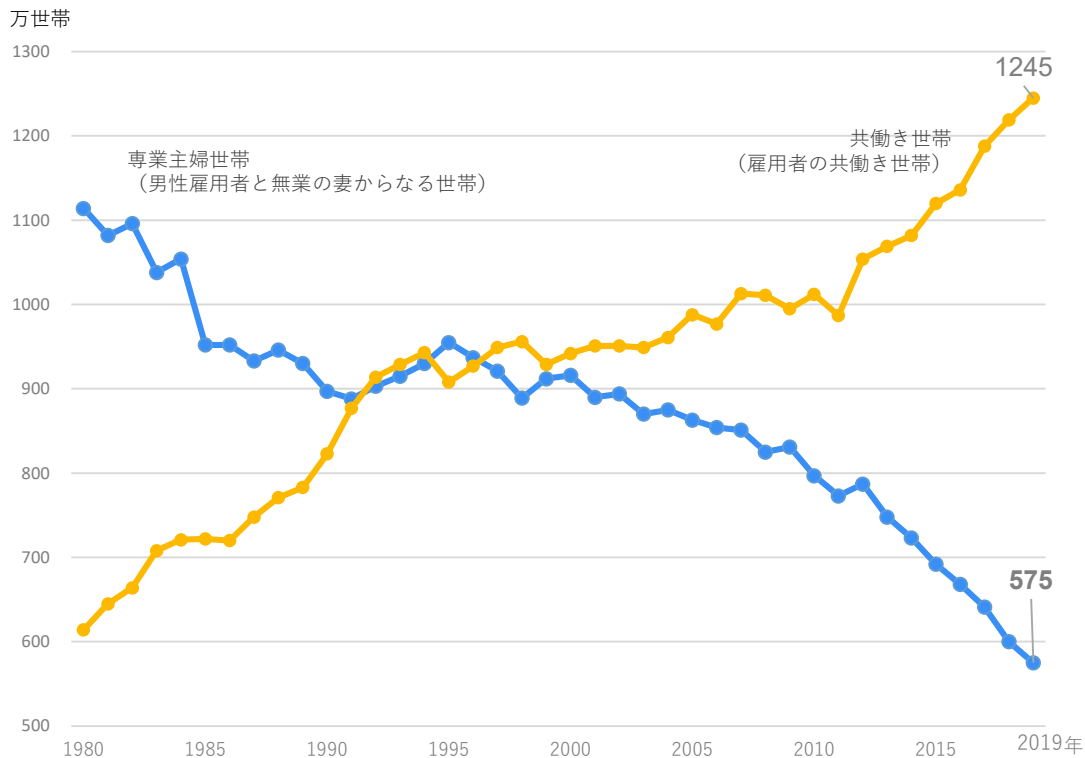
※2019年のサービス業は、以下の分類の総計：学術研究、専門・技術サービス業、生活関連サービス業、娯楽業、教育、学習支援業、医療、福祉、複合サービス事業、サービス業（他に分類されないもの）

今と保護者世代の環境を比較すると、大学進学は、保護者世代が4人に1人だったのに対して、現在は2人に1人。経済成長率の平均値は、1974~1990年度の4.2%に対して、2004~2015年度は0.74%にダウンしました。求人倍率は、バブル期は2倍以上の「超売り手市場」だったのに対して、現在は1.53倍。日本の産業構造の変化も大きな特徴です。保護者の多くが就職した当時は製造業が世界を席巻しており、就職先の代表格は「メーカー」でした。現在では、サービス業の比率が上昇。インターネットを中心に、30年前には見られなかった新しいサービスが台頭してきています。就職活動の仕方も同様で、情報収集はインターネット、資料請求もインターネットからのエントリーが必要になり、会社説明会や面接もWebで行う企業が増えています。今の就職活動生は、Webを使いこなすことを前提とした就職活動を行う「Web世代」と言えるでしょう。

2

共働き世帯の推移

■共働き世帯が一般的になり、労働人口は減少の見込み



厚生労働省「厚生労働白書」、内閣府「男女共同参画白書」、総務省「労働力調査特別調査」（2001年以前）
及び総務省「労働力調査（詳細集計）」（2002年以降）

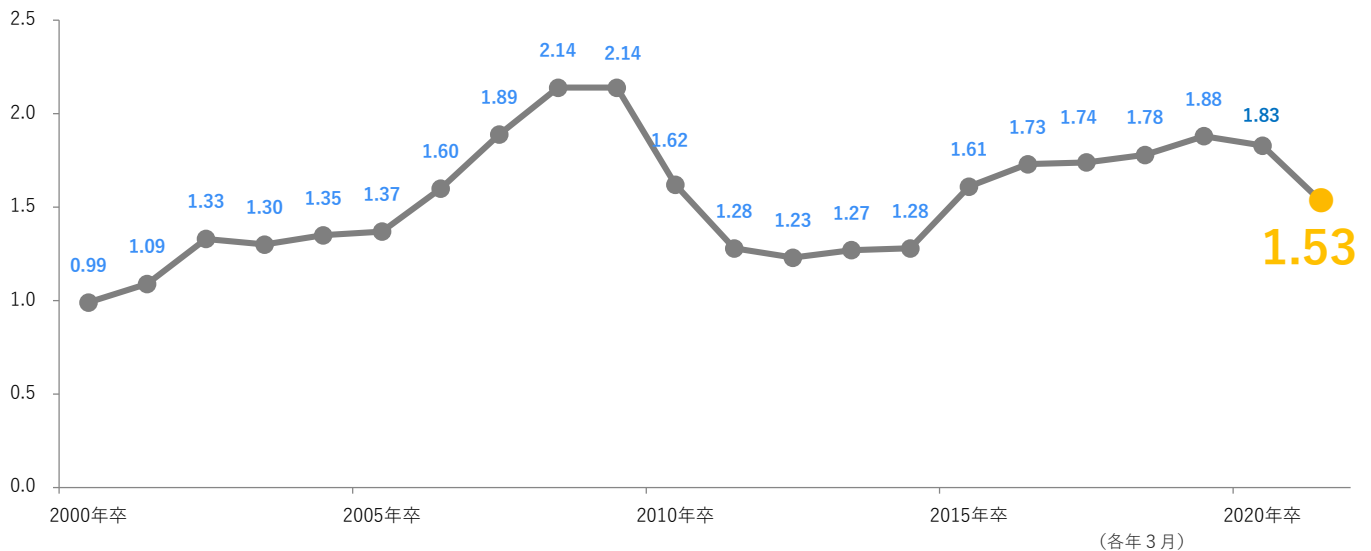
労働人口の構成を見ると、専業主婦世帯(男性雇用者と無業の妻からなる世帯)と共働き世帯の数は、1997年を境に逆転し、以降、共働き世帯が増加。2019年では、それぞれ575世帯と1,245世帯と、共働き世帯が専業主婦世帯の約2倍に達しています。今の日本では、共働き世帯が一般的であると言えます。日本の人口が大きな減少傾向にあることに伴い、労働人口についても、今後は減少が見込まれています。2045年ごろには、1990年と比べ20～64歳のいわゆる生産年齢人口が2420万人減少するという推計もあります。今の学生の世代を含めた労働人口は、長期に渡って減る一方であることが、予測されています。

3

大卒求人倍率の推移

■ 大卒求人倍率は、経済状況によっても変化する

(倍)



(リクルートワークス研究所『ワークス大卒求人倍率調査』)

2021年3月卒業の大学生・大学院生対象の大卒求人倍率は1.53倍でした。これは民間企業に就職を希望する学生1人あたり、1.53件分の求人があることを示します。新型コロナウイルス感染症の影響で、企業は採用計画を縮小し、大卒求人倍率は、10年ぶりに0.3ポイント以上低下しました。従業員規模別に見ると、300人未満企業（中小企業）では3.40倍、5,000人以上では0.60倍であり、規模によって差があることがわかります。業種別では、流通業が7.28倍で一番高く、次いで建設業6.01倍、製造業1.60倍と続きます。一方で、サービス・情報業は0.34倍、金融業は0.28倍と、業種によって違いが見られます。

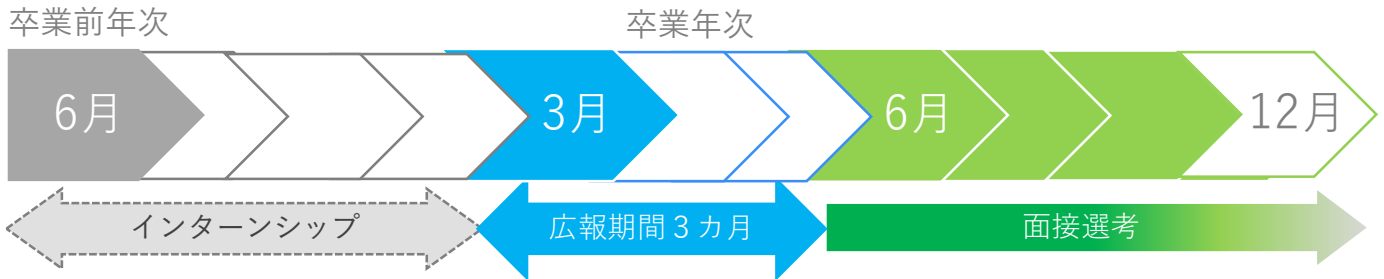
※各従業員規模、各業種への就職希望率は、第一志望の情報をもとに算出

大卒求人倍率は、民間企業の採用数（需要）と、就職を希望する学生の人数（供給）のバランスであるため、リーマン・ショックの影響で求人倍率が低下した2010年卒のように経済状況によって変化します。就職・採用環境を把握する目安になっています。

4

就職活動のスケジュール

■一般的な就職活動スケジュール



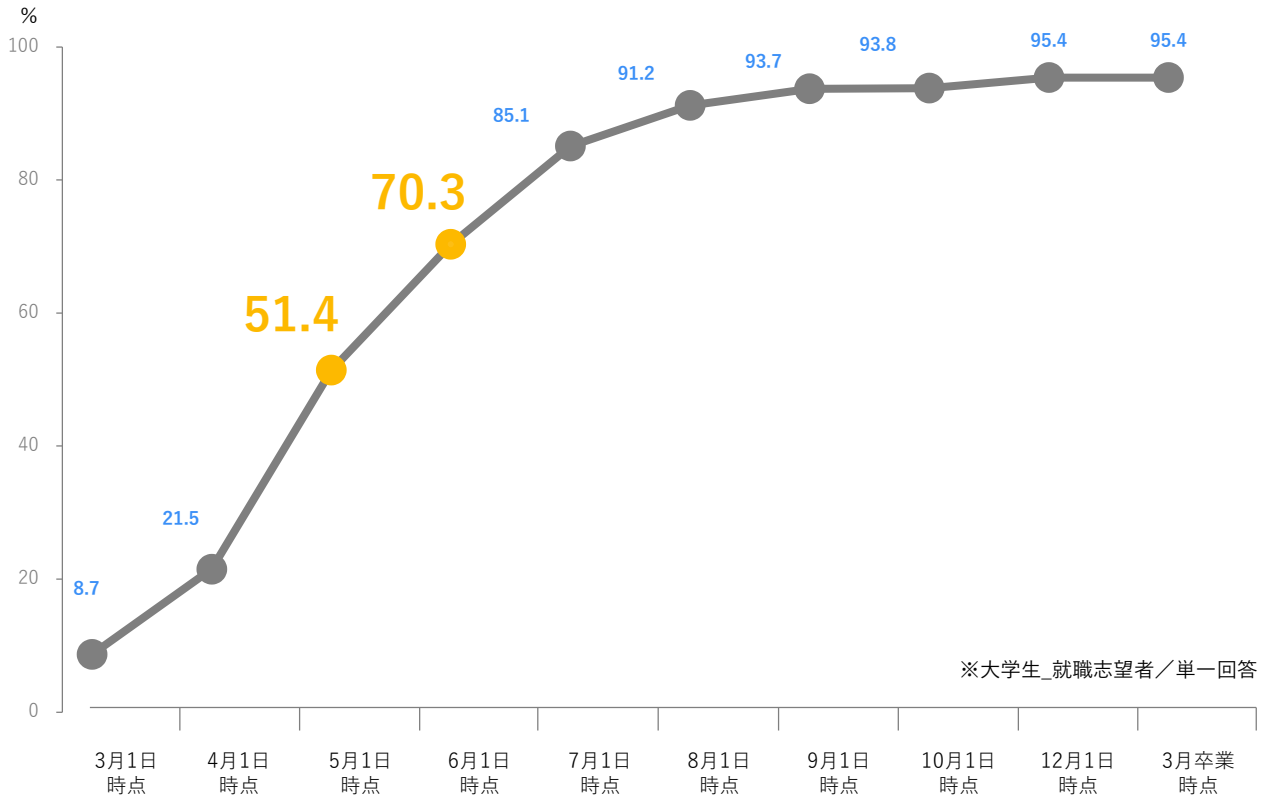
現在の就職活動スケジュールは、上の図の通り。就職活動生向けの企業の採用広報は、卒業前年の3月1日から始まります。このとき公開された企業の採用情報をもとに、学生がインターネット等で「プレエントリー」するのが一般的。プレエントリーをした企業からは、追って企業説明会などの通知があります。企業同士の比較・検討を通じて働きたい企業を絞り込んだら、選考を受けたい企業にエントリーシートを提出します。エントリーシートは、企業によって項目やスタイルが異なり、書類選考や面接に利用されます。その後、正式には6月から面接などの採用選考が始まりますが、企業によっては4～6月からは内々定（内定）が出始めます。

卒業前年次の夏ごろから学生が企業の中で行う就業体験「インターンシップ」に参加する学生が増え、大学の先輩など社会人に話を聞く「OB・OG訪問」をする学生もいます。上の図のスケジュールに沿って採用活動を行わない企業もあり、就職活動が忙しい時期は、選考を受ける企業や業種によってさまざま。一般的には説明会やエントリーシートの提出が立て込む3～4月が多忙になる学生が多く、「3月半ばまで業種・業界を絞らずにいろいろな会社説明会に参加し、その後、興味を持った業種・業界に絞ることができた。4月からゼミが始まり、本格的に就職活動を進めながら、卒業論文に取り組んでいかなければならず、選考のスピードも早いので、とても忙しくなると思う」（中部／文系）といった声も寄せられています。

5

就職内定率の推移

■ 2020年卒 大学生、就職内定率の推移



※大学生_就職志望者/単一回答

(就職みらい研究所『就職プロセス調査 2020年卒』)

大学生（大学院生除く）の就職内定率（就職を志望する大学生のうち、当月までに内定・内々定の取得経験がある学生の割合）は、卒業年次の5月1日時点で約半数に達しています。6月に企業の採用選考が解禁した時点では、約7割の学生が内定・内々定を得ていました。ただし、早く内々定・内定を得ることが必ずしもいいこととは言えません。「GW前に内定をいくつか得たことで安心してしまい、第1志望の会社の選考の対策を怠って失敗してしまった」（中国・四国/文系）という学生も見られました。

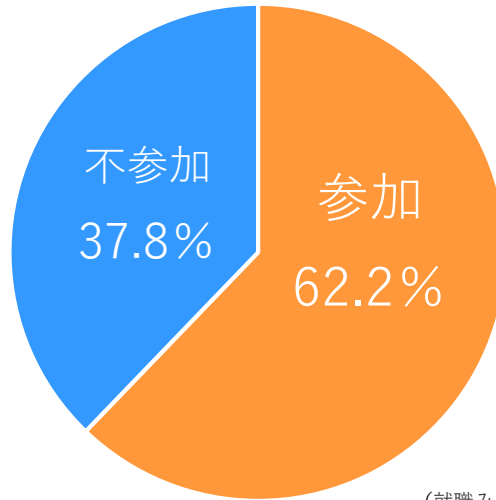
また、進路確定率で見ると、5月1日時点で約3割、6月1日時点で約半数、7月1日時点で約7割であり、卒業年次の5～6月に進路を決めている学生が多いことがわかります。

※「内定」とは、在学中に締結される“卒業後を始期とした労働契約”ととらえることが多く、「内々定」はその前段階のことで、厳密な定義はありません。また、正式な内定日は「卒業・修了学年の10月1日以降」です。

6

インターンシップ参加率

■ インターンシップ参加率は、約6割



(就職みらい研究所『就職白書2020』)

インターンシップに参加した2020年卒の学生は62.2%で、年々増加傾向です。キャリア教育の一環として大学の授業で行われるものもあれば、学生が個人で申し込むものもあり、参加方法はさまざまです。「インターンシップへの参加」を就職活動の開始と認識している学生が全体の25.7%という調査結果もあります。学生が初めてインターンシップに参加する時期についても、早まる傾向が見られます。参加したインターンシップの平均社数は、4.53社ですが、「1社のみに参加」という学生も24.3%と、全体の約4分の1を占めています。

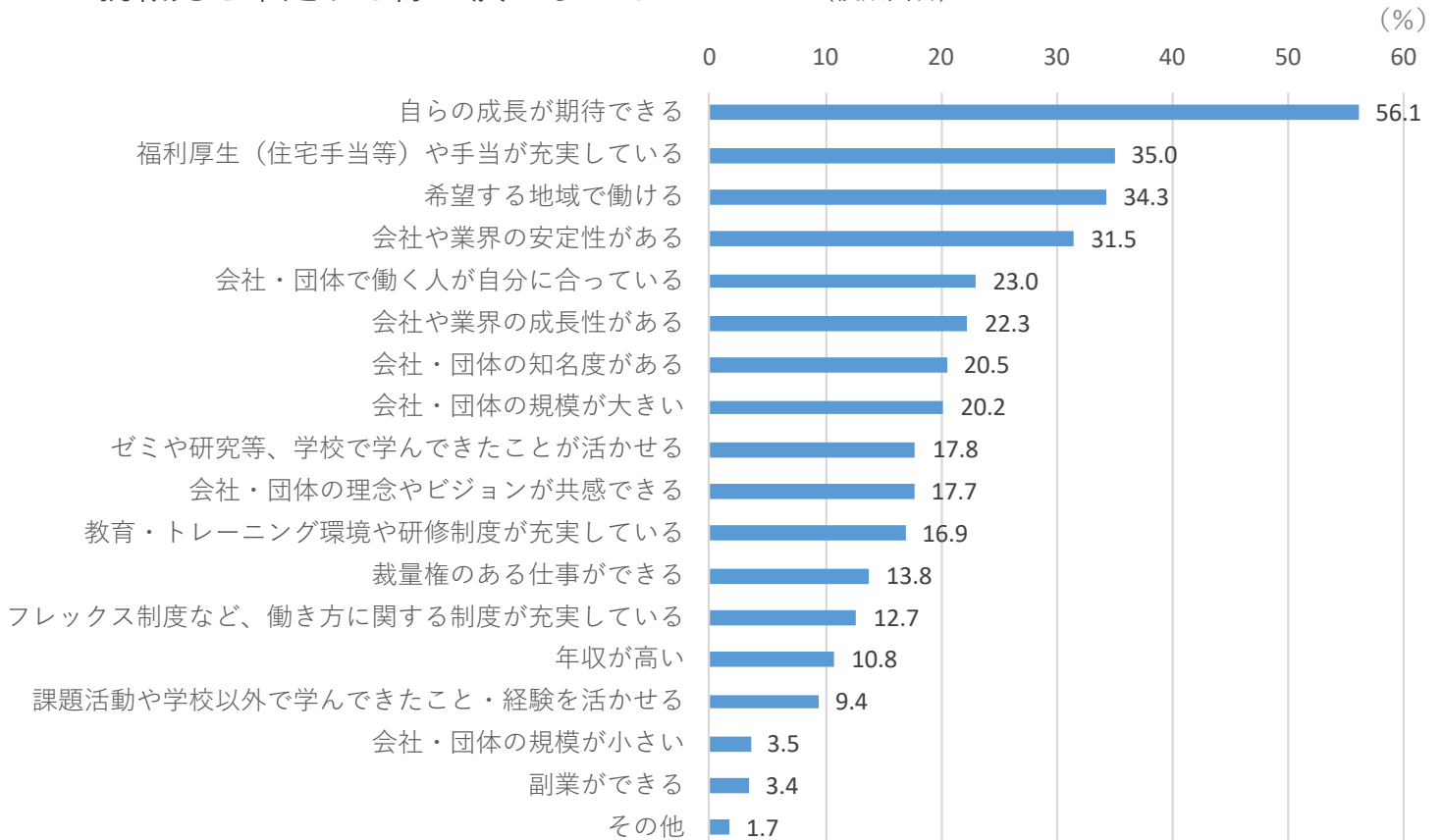
インターンシップに参加することで、業種や職種についての理解が深まる、自分自身のスキルを見極められる、キャリア観を明らかにできるなどさまざまな効果が見られます。学生からは「大学3年の夏からインターンシップに参加し、自分のやりたいことを探っておいたことで、解禁後すぐ動くことができた。きつかったしつらかったが、やはり早めに動いておいてよかった。」(中部・理系)といった声が聞かれました。

近年は、インターンシップに参加した企業に入社する学生の割合も増えています。企業の採用人数はインターンシップの受け入れ人数よりも多く、インターンシップに参加していないからといって就職できないということはありませんが、学生自身が成長する貴重な機会になっています。

7

入社予定先の決め手

■ 就職先を確定する際に決め手となったこと（複数回答）



（就職みらい研究所『就職プロセス調査』2020年卒 3月卒業時点）

就職先を確定する際に決め手となったこととしては、「自らの成長が期待できる」が56.1%と高く、次いで「福利厚生（住宅手当等）や手当が充実している」35.0%、「希望する地域で働ける」34.3%、「会社や業界の安定性がある」31.5%と3割台で続きました。「会社・団体に働く人が自分に合っている」「会社や業界の成長性がある」「会社・団体の知名度がある」「会社・団体の規模が大きい」も約2割に上りました。就職時点で転職を意識している学生も増え、「新卒入社した会社で定年まで勤め上げる」という考えだけでなく多様な働き方を志向しています。「自ら成長」することのできる、どこに行っても通用する汎用的なスキルが身につく組織への支持も高まっています。

8

就職活動にかかる費用

■ 就職活動にかかった費用の平均金額は、10万円を超える

活動全体 12万8890円

交通費	4万9467円 (使用率98.2%)
被服費	3万6869円 (使用率86.6%)
宿泊費	2万7059円 (使用率20.5%)
飲食費	1万2488円 (使用率87.3%)
書籍費	5697円 (使用率63.1%)
公務員試験対策費	10万5195円 (使用率10.9%)
スキルアップ費用	2万3847円 (使用率28.7%)

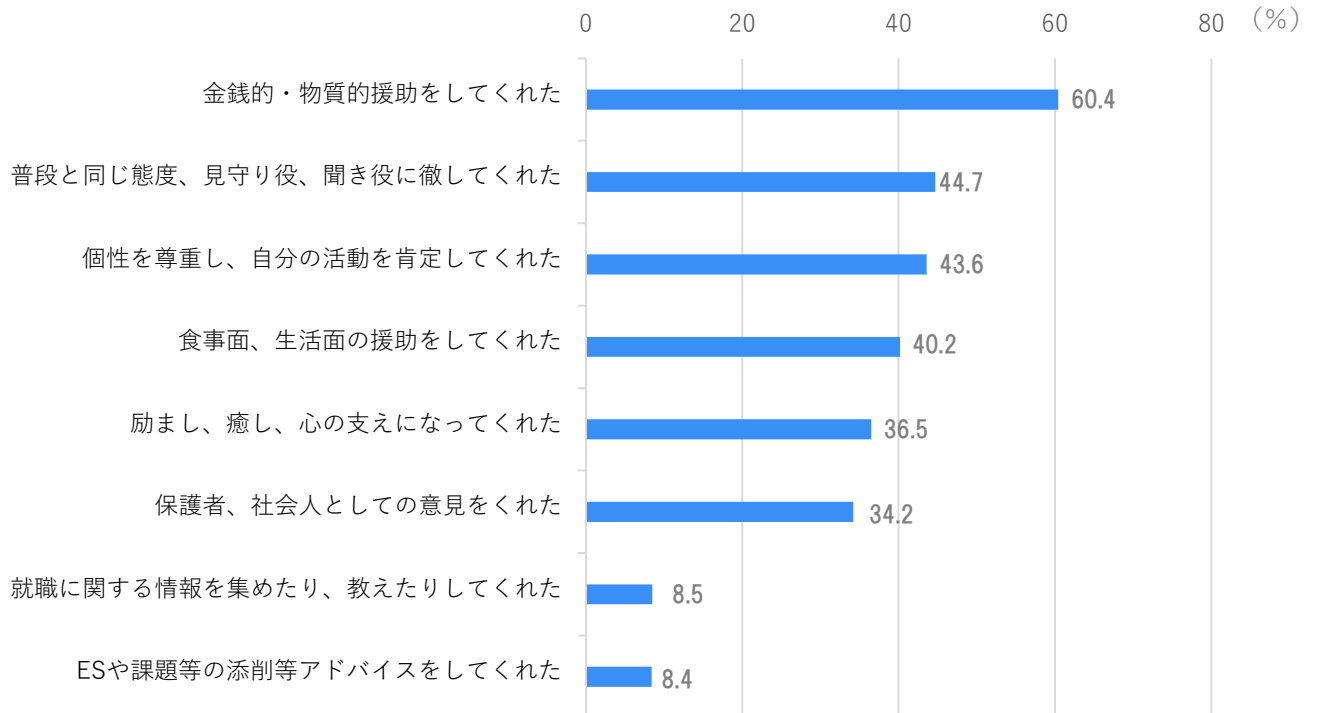
(就職みらい研究所『就職プロセス調査 2020年卒 7月1日時点』)

就職活動にかかった費用の平均額は、就職活動全体では、約13万円です。地域別では、北海道・東北、中部、近畿、九州で「10万円以上20万円未満」の学生の割合が最も高く、関東、中国・四国は「5万円以上10万円未満」の学生の割合が最も高くなりました。用途別に見ると、交通費が一番高く、約5万円。多額の交通費がかかった学生は、九州や北海道、東北エリアの学生に多い傾向がある一方で、同エリアには、さほど交通費がかかっていない学生も混在。遠方に出向いて就職活動をしたかどうかで交通費の額に影響していることがうかがえます。学生からは「出身県外の大学に進学したため、地元で就職先を見つける際、交通費がかかってしまった。就活を始める前に準備しておく必要があったと感じている」(北海道・東北/文系)という声も聞かれました。次いで、スーツやワイシャツ、ブラウスなどの被服費が4万円弱、説明会や面接のために遠方に行った際の宿泊費が3万円弱となり、説明会や面接などにかけた際の飲食費も1万円を超えました。

9

保護者とのかかわりで「よかったこと」

■ 保護者とのかかわりでよかったこと（複数回答）



※「金銭的・物質的援助をしてくれた」は「金銭的援助をしてくれた」と「物質的援助をしてくれた」の合算値
※全11項目より上位8項目を抜粋
(就職みらい研究所『就職プロセス調査 2020年卒 12月1日時点』)

就職活動を終えた学生に対するアンケートでは、「保護者とのかかわりでよかったこと」があったと回答した学生は、「嫌だったことがあった」という学生の2倍以上になりました。さらに「就職活動における保護者の関与で、嬉しかったこと・役に立ったこと」を尋ねたところ、「金銭的・物質的援助をしてくれた」が最も多い結果となりました。このように回答した学生の中からは、「就職活動を遠方で行ったので、交通費を工面するのが難しかったため、資金を援助してもらっていた。食費節約のために、おにぎりを作って持たせてくれたのもありがたかった」（中部/文系）という声もありました。

データからは、個人差はあっても、結果的に多くの就活生が「保護者の関与」を歓迎し、就職活動につながっていることがわかります。就職活動や学生のためには保護者のサポートが大切であると言えます。また、就職活動中だからと特別に意識せずに、普段通りに接することも重要です。

10

保護者とのかかわりで「嫌だったこと」

■ 保護者とのかかわりで「嫌だったこと」 (複数回答)



※全11項目より上位9項目を抜粋
(就職みらい研究所『就職プロセス調査 2020年卒 12日1日時点』)

就職活動を終えた学生に「保護者とのかかわりの中で嫌だったこと」を尋ねたアンケートでは、「特にない」と回答する学生が6割を超える中、明確に「これが嫌だった」と回答した学生も少なくありませんでした。アンケートのコメントから見えたのは、「否定」「誰かとの比較」「意見の押し付け」といったようなキーワード。例えば、「志望業種について意見された」では、「第一志望の業界について、『将来性のない業界』などと、ネットなどの正確でない情報を根拠に否定し、他の業界や企業を勧めてきた」(中国・四国/文系)という声もありました。就職活動で大変な思いをしている学生にとって、身近にいる保護者がストレスになってしまうのは好ましくありません。また、それが子どものためを思っていることならば、なおさら本末転倒です。

ご紹介した10個のデータから、今の就職活動、お子さまを取り巻く状況がわかりいただけたでしょうか。就職活動に関してさまざまな支援の形がありますが、重要なのは、進路を決めるのはお子さま自身であると認識していること。そして、お子さまがもう大人であるという前提で、信じて任せることが大切です。就職活動中だからといって、特別なことをする必要はありません。普段からのコミュニケーションが大切です。家族を含めた他人とのあいさつやマナーの徹底など、日ごろの積み重ねがお子さまの成長につながっています。

また、大学のキャリアセンターのサポートも期待できます。お子さまが悩んでいるときなど、キャリアセンターの利用を促すのも良いでしょう。

就職活動を終えた学生から「大変だったけど自分が成長できたと感じられる機会になった」という声を聞くことも少なくありません。社会人になる第一歩である就職活動を通じて、お子さま自身が成長し、自信を持って社会に出ていけるよう、保護者の皆さまには温かく見守っていただければと思います。

※本記事の無断転載・複製を禁じます

データの転載・引用などに際しては、就職みらい研究所 HP 最下部の「よくあるご質問/お問い合わせ」(<https://data.recruitcareer.co.jp/faq/>) よりお問い合わせください。